

自分への宿題



松 永 伍
一

またファシズムになつていくおそれがある、とよく言われる。なんとなくそんな気配もあるが、まったくおなじ状態が逆もありするとはおもわれない。またおもいたくない。

流行のくりかえしならば、現実にそれがあるから「あり得る」と言えそうだし、背広の襟の広さやスカートの長さは、時代と共に変化するものだから、三十年目にまつたくおなじものになつて「流行する」という現象もおこるのである。

しかし、背広の襟やスカートの長さがどうなると大してかまわないので、世の中が「悪い状態」に逆もどりすること

は、困る。困るから、それを防ぎとめねばならないのだが、それは世の中の力で、というよりは、人々の力（自覚）にたよらないとできないことである。人々は小さい力にちがいないが、それが生きている人間の社会にあっては、もっとも大切にされねばならぬものだ。全体の力を期待するのはファシズムである。そのファシズムを排除するのに全体の力を借りるのは、かえつて危い反動が約束されるようなものである。

私の生まれた昭和五年は、農村恐慌の時代で、百姓のくらしがもつとも窮屈したころだった。そんな時代がまたやってくるとは考えられないが、もし、それに近い、「豊作貧乏」「娘の身売り」などがおこるとしたら、それにどんな対応策を出せるか、はなはだ疑問である。いずれ近いうちに食糧が不足し、地球上に飢餓がやってくるだろうと予言している学者もあるくらいだから、そんな事態が起つたとしたら、文字通りの「終末」がやつてくるわけである。

*

*

*

そんなことをときどき考えたりするが、このごろ子守唄収集の旅をしているために、老婆の話とそのこととが合致することもあって、「ああ、また飢えもくりかえすことになるか」との実感を持たされた。

「オラ、こがえに人の知しやね難儀は、かぶつて來たたて、今の人達ア、『昔の人ア、馬鹿なもんだズ』って、一言で片付けつべげんと、こがえに馬鹿ばみた人ア有つたさえて、今も村ア

有んなでねエベが？ つて、オラ、我アの気持ちは強ぐして、
鎮めてるぞ。

昔の小作人なの、みな無くなつて、今ア良え世ン中えなつた
もんだズ。若い人達ア、一人で大人えなつたみでエな氣イして
ヨ。

この頃ヨ、昭和初め頃にはやつた、"職にあぶれで、日が暮
れて、花の都のすみまでは、いつになつたら、花が咲くウ" つ
て云う唄ヨ、又のはやり出すみでエで、オラ、小娘の頃は思い
出して、嫌だくなるズヨ。"どうかどうか、昔さだけは戻んね
で呉ろ" つて、オラ、一心えなつて祈つてるズ。

こえづア、ミミズグ（みみず）の心配みでエらもんだかも知
んねエズモ。この地球の上ば食い尽したら、あと、どうすんべ
エつてナ」（筆者編著『歴史をふまえて』三一書房刊）

これは山形県最上郡のある老婆の語らいの一節である。この
人は、昭和九年の凶作のとき、十六歳で新潟へ娼婦に売られた
体験者である。普通のときでも、田一反から五、六俵しかとれ
ないのに、冷害で半作となり、その上小作ときているから、食
いぶちを減らすためにも、働ける者を外に出さねばならなかつ
た。娘は、とりわけ重宝がられた。女衒（せげん）という周旋屋が暗躍
し、貧しい家の娘たちは娼婦への道を急がされたのだった。

この老婆は、「どうか、どうか、昔さだけは戻んねで呉ろ」
と言つう。そう祈つてゐるのである。自分がなめた経験だけは、
多くの人になめてもらいたくない、そんな時代があたたびめぐ
つてくることのないよう、と念じてゐる。この人にとって、
もつともおそろしいのは「くりかえし」である。つまり、悪い
ことが、他人の上に及ぶことを怖れてゐること。さらに
言えば、歴史は逆もどりしてはならないと、歴史学者でない一
人の老婆が祈つてゐるということは、すばらしく、貴いことで
ある。

私は、この語りに接したとき、深く感動した。ここに、すぐ
れた人間がいるとおもつたのである。日ごろ、えらそうなこと
を言つてゐる人だつて、自分のやつてきたこと、やらされてしま
つたことについて、心が痛むような反省をしてゐるとは限らな
い。過ぎたことはもう仕方がない、と言つてしまえば万事片づ
くとおもいこんで、そんなふうに「水に流すように」処理して
いく人が多い。その人は、自分に対しても責任を負おうとしな
い、とみられて仕方がない。しかし、この種の人がいかに多
いとか。

* * *

中国の詩に「年々歳々花相似、歳々年々人不同」というのが

ある。これは毎年々々、花は同じように咲くが、それにひきかえ毎年々々人は変化していく、という意味である。自然はつねに繰返しているが、人間は生命の終りにむかって刻々と歩んでいるという比較は、実によくわかる。おそらくこれも真美であろう。人間は、毎日々々同じように、起きて、食事をして、排泄をして、寝る……という繰返しのなかに、幸福を味わったり、不幸だと悲観したりすることに馴れてきた。これは「くりかえし」の自覚の上に、幸福も不幸も重なってくるということなのだが、本当の幸福をつかむことは、こんな他力本願にものづいているとは言いきれない。

流れるよう生きるとか、単純に繰返して事をすませていく

ところに、手ごたえのある幸福は生まれて来ないのでない。幸福になるためには、自分に対するきびしい宿題を課されなければならない。たとえ不幸になつたとしても、その不幸の本質をつきつめていくことは、幸福になるために自分に対するきびしい宿題を課すときの態度と、決してちがわないともう。

宝くじに当るといった偶然は、たしかに幸福をもたらすのだけれど、これは一瞬の、たとえば大空の花火のようなもので、大金は残るかもしれないが、心の充実は永づきしない。幸福は自分の手でつかみとるものであり、「くりかえし」のマンネ

リズムのなかからは、そう易々とはいってくるものではなさそうにもおもえる。

ただ、「くりかえし」が必要なのは、すばらしい内容の幸福をつかむため、あるいは自分自身を大きくなづくりあげるために執拗に問うていくときだけである。執拗に問うということは、「くりかえし」によって意味を持つし、よい成果をもたらす。それはたしかである。こういう「くりかえし」ならば、決して避けはならないはずである。ということは、自分への宿題を問うことは、つまり、その問いを執拗に繰返すことに他ならない、ということだ。

* * *

私は、時代が逆戻りしたり、悪い状況がふたたび繰返されたりすることのないよう、ひそかに祈っているし、「くりかえし」の怖さをときどき考えもあるが、そういう事態に至らないようにするためには、自分一人々々が、人間のあり方、歴史のあり方を問うていくしかないという信念を持ちはじめている。一人の力は小さいが、小さな真実が集まると強いということでも、信じていよいよおもう。それは幸福になるために自分への宿題をきびしくしていくことと別のものではない、という発見もあるのだが。